

# 違いを力に

## 発達障害をめぐる現場から

(2)

ヤシガニやグリーンパンシリスなど、約30種類の動物が6畳ほどの洋室で整然と飼育されている。中学2年の時に広汎性発達障害と診断された弦川樹さん(18)が、大阪市平野区の自宅の部屋で手塩にかける生き物たちだ。動植物について学べる専門学校に通いつつ「将来は自分のペットショップを開きたい」と意気込む。

発達障害が分かったのは、睡眠障害を発症したのがきっかけ。親の勧めで小学校から始めたサッカーは「どれだけ努力しても上達せず、中学の部活ではいじめられた」。辞めたかったが、親にうまく伝えられな

いままストレスはたまり、眠れない体になった。運動が苦手だったり、自分の思いを的確に表現できなかったりする特性は発達障害でよくみられる。樹さん

■「相談できる」  
両親は樹さんが思いを語りやすいよう質問するなど特性に合わせた工夫をし、生き物の飼育といった得意分野を応援。樹さんは、自宅でヤシガニの脱皮に成功して専門家から評価され、高校では生徒会長や写真部の部長を務めるなど、次々と才能を開花させた。

息子の成長について、母の紀子さん(41)は「話を聞き、受け止めてくれる大人の存在が大きかった」と振り返る。カウンセリングや薬物治療を行う精神科医は「もちろん、塾の教師や学校

## 第1部 本人と家族の挑戦

の教員。とりわけ樹さんは意欠陥多動性障害(ADHD)の元店長に感謝する。「体調が悪ければ気遣ってくれたし、仕事以外の相談にも乗ってくれた。今があるのはこの人のおかげ」

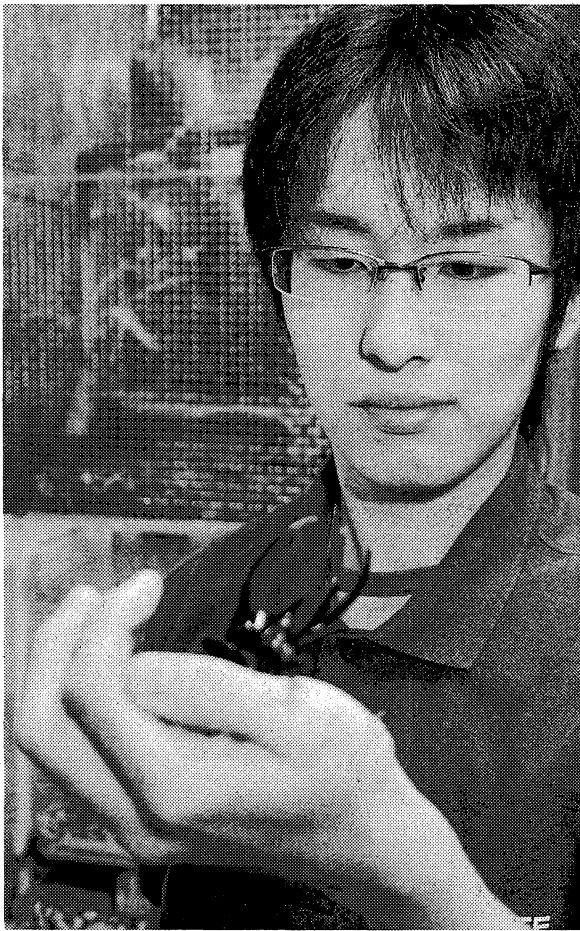
「理解ある大人」との出会いが樹さんの人生を支えた。発達障害の一つ、注

■深みにはまる  
「働きたいのに働けなかつた」。怒られる機会は日に日に増え、定職にも就

けない。「見た目で障害が分からない分、余計理解を得られなかった」  
自分の意思とは無関係に不安感などが生じる強迫性障害も二次的に発症。行き詰まる中で親が当事者団体に連絡した。同じ苦しみを

■費用のかけ方  
発達障害は、周りの環境や理解が本人の人生を大きく左右。社会の制度設計が専門の西條辰義大阪大教授は、社会のあり方について提案する。

「困った子」に対し、①放置して、費用をかけない  
②非生産的な行動が生まれ、大きな社会的コストが発生する場合がある③きちんと支援し、費用をかける  
④生産的な仕事をするようになり、費用をかけないときよりも社会が得をする  
の構図を提示。



# 理解ある大人が支え 困った子 生かす制度

「困った子」  
生かす制度

分ち合い、克服する方法を学べる「仲間」と出会った今が「スタートライン」だ。

教育らの研修機能の強化や学校の多様化で「発達障害」に対応できるのを当たり前にする「必要性を訴える。発達障害の特性があったエジソンなど「困った子」の一部が素晴らしい発明や創作をするのなら、社会的なレベルで彼らを大事にしない手はない」。それは、一人一人の違いを生かす社会制度にもつながるとみている。